

令和 5 年 2 月 24 日

教 育 長 様

研究コース
S 研究テーマ指定 (F)
校舎コード (代表者校舎の市費コード)
761760
選定番号 306

代表者 校 園 名 :	大阪市立長橋小学校
校舎長名 :	坂 幸之介
電 話 :	06-6561-4692
事務職員名 :	藤原 由依
申請者 校 園 名 :	大阪市立長橋小学校
職名・名前 :	主務教諭・藤川昌代
電 話 :	06-6561-4692

令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 4 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	S 研究テーマ指定 (F)	研究年数	新規研究 (1 年目)
2	研究テーマ	<p>「一人ひとりを大切にする人権教育推進の観点から、 多文化共生教育の充実を図る」 —民族学級・フィリピン学級・多文化共生学級の活動を通して—</p>			
3	研究目的	<p>昨今、国際化が急速に進展し、民族や文化の多様性ますます拡大しつつある社会にあって、「多文化共生教育」の実現をめざすことは、大阪市教育振興基本計画で示されている通り、本市の重要な課題である。本校では、同和教育を出発点として、民族学級の開設に至り、さらに、フィリピン学級・多文化共生学級の発足と、「一人ひとりを大切にする教育」の一つのあり方を多文化共生教育の実践として取り組んできた。今年度、子どもたちの声から始まった民族学級が開設されて50周年を迎える。多文化共生教育の意義を再確認するとともに、ちがいをちがいとして認め合い、互いに尊重しながら豊かな心を育む民族学級の実践をはじめとした、多文化共生教育の研究と実践を発信し、民族教育・外国人教育の必要性を広めていきたいと考える。また、これらの教育をさらに発展させ、その成果を全市に発信することで、国際都市大阪における多文化共生教育の方向性を提案し、意見をいただくことで、本校の「一人ひとりを大切にした教育」のさらなる発展につなげていくようにする。</p>			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSコピック 9.5ℓ イント)</p> <p>①民族学級 ・開級式(5/13, 5/27)、発表会(11/16)、修了式(3月予定) ・学年ごと毎週1回金曜日に実施 活動内容: 遊び、ことば、歴史、音楽、地理、作品づくり、風習、食文化など</p> <p>②フィリピン学級・多文化共生学級 ・開級式(5/26)、発表会(2月予定)、修了式(3月予定) ・毎月2回(第1、第3木曜日)実施 活動内容: 遊び、ことば、歴史、音楽、地理、作品づくり、風習、食文化などを学び交流する。購入したiPadを活用し、子どもたち同士で調べたことや考えたことを伝え合うことができた。</p> <p>③各学級での交流活動 ・課内実践 各学年1時間講師による学習・総合の時間、学級活動での交流 ・給食交流</p> <p>④全校活動 ・民族学級発表会(11/16) ・民族多文化フェスティバル(2/18) 4月、5月 全体研修会 6月 年間研修計画の作成 南大阪民族交流会参加 市人教大会参加 8月 校内夏季研修会実施 10月 中国語弁論大会参加 11月 民族発表会実施(参加者アンケート) 全体研修会 南大阪こども民族音楽会参加 朝鮮人学校と交流 2月 民族多文化共生フェスティバル実施 国際クラブ意見交流会発表 教員・児童への事後アンケート実施・分析・結果の考察 講師を招聘し、校内研修を5回行った</p>			

5	研究発表等の の日程・ 場所・ 参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。				
		日程	令和4年11月16日	令和5年2月18日	参加者数	約 8.4 名
		場所	大阪市立長橋小学校			
		備考				
6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u> および <u>教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。				
		【見込まれる成果1】 民族学級、フィリピン学級・多文化共生学級児童の、民族のアイデンティティが高まるとともに、自尊感情も高まる。 《検証方法》 民族学級発表会、フィリピン学級・多文化共生学級発表会後にアンケートを実施し、「いきいきと演目の発表をできたか」の質問の項目で、児童の肯定的な回答を85%以上にする。 〔検証結果と考察〕 民族学級発表会、フィリピン学級・多文化共生学級発表会後にアンケートを実施した結果、「いきいきと演目の発表をできたか」の質問の項目では、児童の肯定的な回答が96%だった。発表会などの多文化理解の学習を通して、文化の多様性や差異、類似性に気づくとともに、違いのよさにも気づくことができたと考える。同時に、子どもの感想や意見に多く見られたように、「ルーツを大事にしようと思った」「自分に自信がもてるようになった」といった感想からは、自尊感情の育成もできたと考える。				
		【見込まれる成果2】 日本人児童も含めた全校児童が、それぞれの国や地域の文化を知り、自国の文化を尊重するとともに互いの国や地域の民族性や文化などを尊重する態度が育つ。 《検証方法》 民族学級発表会、フィリピン学級・多文化共生学級発表会後にアンケートを実施し、「活動の様子が伝わったか」の質問の項目で、児童の肯定的な回答を85%以上にする。 〔検証結果と考察〕 民族学級発表会、フィリピン学級・多文化共生学級発表会後にアンケートを実施した結果、「活動の様子が伝わったか」の質問の項目では、児童の肯定的な回答が100%だった。ともに、「活動の様子を伝えることができたか」の項目においても100%だった。このことから、日本人児童も含めた全校児童が、それぞれの国や地域の文化を知り、自国の文化を尊重するとともに互いの国や地域の民族性や文化などを尊重する態度が育ち、民族のアイデンティティが高まるとともに、自尊感情も高まったといえる。				
		【見込まれる成果3】 多様な価値観や文化を持つ子ども同士が互いのちがいを認め合い、高め合える多文化共生教育を推進することで、豊かな心が育つ。 《検証方法》 生活アンケートの「自分には、よいところがありますか」の質問に対して、肯定的な回答を75%以上にする。 〔検証結果と考察〕				

		年度末の生活アンケートの「自分には、よいところがありますか」の質問に対して、肯定的な回答は82%だった。「みんなが楽しく元気にやっていたので僕も楽しく元気にがんばろうと思った」「仲間のつながりを大切にしようと思った」といった感想から、共に励まし合い、違いを違いとして受け止め、それぞれの文化をもつ人々のアイデンティティを尊重していく態度、すなわち豊かな心を育むことができた考える。
--	--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】 教員の研修を通して、多文化共生教育の方向性を見出し、「一人ひとりを大切にする教育」の具体的イメージをもてるようになる。</p> <p>《検証方法》 教員へのアンケートを実施し、「研修会に参加して役に立った」の肯定的な回答を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕 教員へのアンケートを実施した結果、「研修会に参加して役に立った」の肯定的な回答は、100%だった。外国にルーツのある子どもたちが豊かに育つためには、互いが認め合い、高めあえる環境づくりが大切であることを発信したところ、まずは、教師がしっかり、歴史的経緯や多文化共生教育の意義などをしっかり学ぶことが大事だと多くの感想があった。</p>
		<p>【見込まれる成果5】 本研究を推進し、成果等を全市に発信し、意見をもらうことで、多文化共生教育のさらなる実践へとつながる。</p> <p>《検証方法》 参加者へのアンケートを実施し、「持ちかえって実践したい取り組みがあった」の肯定的な回答を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕 参加者へのアンケートを実施した結果、「持ちかえって実践したい取り組みがあった」の肯定的な回答は100%だった。研修では、日常の学校生活の中で、意図的かつ計画的に多文化と出会い・触れ合い・親しめる環境を作っていく工夫を提案したり、他校からも教員を招き、民族講師から在日朝鮮人の歴史的背景や民族学級の実存意義、民族の遊びを学んだりしたことで、明日からの実践に活用できる研修となった。</p>
		<p>【研究全体を通じた成果と課題】 具体的に記載してください。</p> <p><成果> ・全校への発表会を行い、それぞれの学びを発表し、民族学級、フィリピン学級・多文化共生学級児童の民族的アイデンティティーが高まるとともに、自己肯定感も高まった。 ・各学級で民族文化を学んだり、全校児童に、それぞれの文化について発表し、体験する機会を設けたりすることで、日本人児童も含めた全校児童が、それぞれの国や地域の文化を知り、自国の文化を尊重するとともに、互いの国や地域の民族性や文化などを尊重する態度が育った。 ・保護者参加も文化体験できる活動を企画し実行することで、民族学級やフィリピン学級・多文化共生学級の保護者同士が交流し、学校と保護者の連携を深め、保護者間の連携も深めることができた。 ・教職員にとっても、在籍する児童の民族性や文化、保護者のもつ民族性について理解が深まり、「一人ひとりを大切にする教育」の具体的イメージがもてるようになった。</p> <p><課題> ・本研究をもっと多くの学校に推進し、多文化共生教育のさらなる実践、成果へつなげていく必要がある。</p>
		<p>《代表校園長の総評》 本校に在籍する、40%以上の外国につながるのある子どもたちのために、そして、その子どもたちとともに学校生活を過ごす本校全ての子どもたちのために、がんばる先生支援事業を受けた。そして、これまで取り組んできた実践を改めて歴史とともに振り返り、さらなる深化充実に努めてきた1年間であった。</p> <p>検証結果の客観的数値からも分かるように、全ての評価項目において目標を達成している。何よりも、外国につながるのある子どもたちが自分に自信をもち、自身のつながりに誇りをもてるようになるとともに、周りの子どもたちがさまざまな国や地域につながるのある子どもたちの存在を知り、文化や習慣、民族性の違いを認め合い、互いに尊重することができた。「一人ひとりを大切にしたい人権教育推進の観点から多文化共生教育の充実を図る」ことができたと言える。本校の取り組みをこれからも発信し、大阪市が掲げる多文化共生指針の実現を図るとともに、国際都市大阪を担う子どもたちの育成に努めていきたい。</p>